



2017年10/11月号  
 新版 第88号  
 編集  
 駿台甲府高等学校  
 駿台甲府中学校  
 駿台甲府小学校

## すべての科目で、チャレンジ

駿台甲府小中高指導監 石川 博

高校二年生になると、週二時間の家庭科の授業がある。かつては、女子だけが履修し、調理や裁縫などの実習が中心だった。それが共学化され、今でも実習はあるものの、教科書は様変わりしており、ずいぶん幅広いテーマを扱うようになっていく。

家庭科の教科書の目次によると、前半は「自立して生きる」と題され、衣食住や消費について学ぶ。その中で日本の食料自給率やフェア・トレードについて考える項目もある。また、消費トラブルやネット詐欺に巻き込まれないよう注意を促す項目や、グローバル社会の中での日本経済といったマクロな項目もある。「持続可能な社会」が各項目を貫くテーマとなっており、環境問題を意識させる構成である。

一方、教科書の後半では「支えあって生きる」と題され、多様化するライフスタイルの問題、高齢化や少子化、子育ての問題を扱い、認知症や子ども園はもちろん、セクシュアルハラスメ

ント、過労死、障害者自立等についても扱っている。

以上、「家庭科」と言っても、小学校、中学校の科目でいえば「社会科」に含まれる項目が中心であることがお分かりいただけたかと思う。

### 小論文の学習は家庭科でも

「家庭科」で扱うこれらのテーマは、大学入試の小論文でもしばしば問われる項目だ。私は、国語科を担当しており、この時期、大学入試に向けての小論文の個別指導を行っている。過去に出題された問題を書かせたり、様々なテーマで小論文を課すが、その際に、大学入試問題を中心として編集された家庭科の副読本を利用することが少なくない。大学側としても、高校生の学んでいないテーマの小論文では議論が深まらないので、既に学んだ項目から出題するのが基本であろう。すると家庭科の教科書を参照して出題することになりがちである。

本校では家庭科の時間に年間数本の小論文を書くようなカリキュラムを設定している。先日、ジェンダーについて書いた生徒の小論文を少し読んだと

ころ、多くの小論文が論理的で、きちんとテーマを理解していた。まだオリジナリティの面では指導の余地があるし、もっと漢字や語彙力といった基本を学ばなければならぬ生徒もいるが、大学入試を視野に入れた小論文として、多くの生徒は順調である。

もちろん、家庭科を学ぶ第一の目的は、大学入試に出題されるからではない。生徒一人ひとりの将来の生活に必要必要な知識や考え方を身に付けなければならぬからである。これまでの大学入試は、特定の科目でのペーパー試験が中心の、一般入試と呼ばれる選抜方式が中心だった。しかし、推薦等の多様な選抜方式が増えてきたときに問われる、総合力、思考力、問題解決能力とは、特定の科目の力だけに偏るものではない。このことは、普段のあらゆる科目の学習と、大学入試のための勉強が乖離していない、ということだ。そして、それは、大学が受験生に求める能力なのである。つまり、センター試験（あるいはその後の「共通テスト」）の科目にあるかないか、私立の入試科目は何か等について、あまりに早くから意識することはかえってマイナスではないか、と思うのである。

### チャレンジング・スピリット

定期考査前になると、「ここ、試験に出ますか」という的外れな質問をする生徒がいる。教員は、そういう質問を惹起させる授業や考査運営をしてい

ることを恥じなければいけない。定期考査に向けて学習をすることは必要だが、より重要なのは日々の授業への取組であり、その授業が有機的につながって、思考力や問題解決能力を育成するのである。定期考査はその到達度を確認する場なのである。教員も「定期考査に出るから覚えておけ」という安易な指示を出すべきではないし、生徒も、教員の言うことや教科書を丸暗記すること、他者の論理をなぞること、を中心に勉強するべきではない。

するべきことは、「自分の頭で考えること」である。ただ、「考える」基礎として一定の知識は必要なので、覚える項目も、特に小中学校段階では多いのだが、それに特化した教育ではない。そして、考えたことを他者に理解してもらうこと、互いの考えを知った上で協力することも必要だ。

駿台甲府では、小学校から高校までICT化を推進し、グローバル教育も推進している。高校では来年度より本格的にコース・フィールド制を導入する。これらは変わってゆく大学入試に対応するとともに、人工知能(AI)が発達する世の中で、人間固有の能力を発揮するための訓練である。自分の頭で考えることは、試行錯誤をともない、時に失敗もする。それを受け止め、生徒の一層の飛躍を目指すのが、本学園の理念であるチャレンジング・スピリットである。このことをご理解いただき、協力をお願いするものである。

## 特集 ヒブリオバトル

ヒブリオバトルやまなし2017

駿台甲府高校 教諭 酒井竜次

今年度から高等学校でスタートしたコース・フィールド制を受け、ヒューマニティーズフィールドでは人前で発表する際のプレゼンテーション能力の向上を目指し、ヒブリオバトルに本格的に取り組むことにしました。

二期はじめにバトラを募集したところ、二年生から二名の応募がありました。書類審査の結果二名とも本戦への出場が決まり、少ない準備期間の中、全国大会出場を目指し、練習を積みました。

中学校でも二名が書類審査を通過し、本戦出場を果たしていましたので、本大会前には中高合同の練習会も開催し、より実戦に近い形で臨みました。また、大会当日は、午後からの本番に備え、午前中県立図書館の交流ルームをお借りし、やはり中高合同のリハーサルを行って、気持ちを高めて本番に臨みました。

いよいよ本番。高校生は、不運にも二名が同じリーグに入ってしまった、予選から同校対決となってしまう。その結果ここで一人が予選敗退、一人が決勝へ駒を進めることになりました。中学生は二名とも予選リーグを順当に勝ち上がり、決勝戦に進出することができました。

決勝戦は三人で争います。高校の部

## 『スキップ』紹介文

駿台甲府高校 渡邊夏蓮

朝、目覚めた時に、2015年になっていたとしたら、どうしますか。想像してみてください。明日が突然、25年後になっていいることを。

まさにこんな事態を描いたのが、北村薫さんの『スキップ』です。主人公は一ノ瀬真理子という普通の女子高生。ある日うたた寝をしていた真理子が目覚めると、そこは見知らぬ人の家。そしてその家の少女に、「お母さん」と言われるのです。なんと、昨日まで17歳の高校生だった真理子は、自身はそのまま、夫と子を持つ25年後の自分になってしまったのです。

もし私がこんな状況に置かれたらまず、いやだ、逃げ出したい、そんな風に思うでしょう。

だって想像してみてください、今から大学に行って、遊んで、恋もして、つらい就活も乗り越えて、仕事もこなして、そうしていつか旦那さんや子供だってできるんだらうな。そんな風に希望にあふれていた未来が突然目の前に突き付けられたら、到底信じられないですよ。

主人公の真理子は、最初の一番楽しい時期と、つらい時期と、自分の一番糧になる時期をすべて捨てて42歳の自分になってしまおう。いわば「最も憧れないシチュエーション」に置かれてしまします。

真理子はその理不尽な状況に戸惑い

ながらも、25年後の自分自身、桜木真理子として、生きていくことになりま。高校2年生の心を持つ真理子は、今は高校教師で、高校3年生の担任。授業はもちろん、部活の指導もこなしたり、学級日誌で生徒と交流を深めたりして、彼女は桜木先生として拙いながらも前に進んでいきます。

印象的だったのは、自分が25年後の家族に「目が覚めたら42歳になっていた。」と打ち明けるシーンです。

そんな信じがたいことを言われたのに、夫と娘はそれを受け入れて、支えてくれます。

二人に支えられながら「自分が自分であるべきものはこの二人に支えられているのだ」「これが夫婦の愛、家族の愛なんだ」ということに気づき、だんだん心地よくなる。日々を過ごしながら愛ってどんなものかわからなかった17歳の真理子の中で、無味無臭の愛っていうものが、自分の中で少しずつ色づいていくんです。

突然ですが、私は朝一人で起きるのが苦手です。こんな今日もお母さんにたたき起こされて、二度も三度も怒られて、やっと布団から出ることが出来ました。

私ほどではないかと思いますが、どの子供もみんな親に甘えて生きている、生きてきたんじゃないかと思えます。

頼みもしないのに、「早く起きろ」だとか小うるさく言う、すごく嫌でした。でもこう言葉にしてみると、そうしてくれるのも家族の愛ゆえにだと感じます。なんだか威張っていたけど、家族に支えられているのってありがたいこ

とだな。

それと対照的に、先生である真理子に恋をしているという成績優秀でイケメンな男子生徒、新田君が現れます。

「僕じゃだめですか。」そう言い寄る新田君に女子高育ちで恋を知らない真理子は戸惑います。だってわたしには妻も娘もいるのに。そんな気持ちとは裏腹にときめいてしまっている自分もいて、葛藤します。

その恋にもどう立ち向かっていくのか、続きは本書で確かめてみてください。

そんな家族の「愛」や「恋」を知り、様々な問題にぶつかりながらも必死に教師として生きていく真理子の姿に私はすごく励まされ、当たり前の毎日を大切に生きようと思われました。

私はこの本を、母に勧められて読みました。

「この本を読んで17歳のあなたはこういう感想をもつか？」母はそんなことを言っていて、私に渡してくれたのを覚えています。

私に何を感じてほしくて母がこの本を渡してくれたのかはわかりませんが、もしかしたら家族の愛を知って、朝ちやんと起きてねというメッセージなのかもしれない。いずれにせよ私はこの本に17歳で出会えたことがとても嬉しいです。

今度は17歳の私からここにいる皆さんに向けて、この本をお勧めしたいと思えます。

あなたはこの本を読んでどう感じますか？ その答えを是非私に聞かせてください。

は二年生の渡邊夏蓮さんが紹介した、北村薫の『スキップ』が他二名を抑え見事「チャンプ本」に選ばれ、優勝を果たしました。

中学生の部も同じく三人での決勝となり、二年生の米山姫生さんが紹介した森見登美彦の『有頂天家族』が見事「チャンプ本」に選ばれました。

本校としては初めての参加で、中高同時に優勝を勝ち取ることができ、良かったです。

渡邊さんは一月に早稲田大学で行われる全国大会に、米山さんは三月に上智大学で行われる全国大会に出場します。

以下に、全国大会進出を決めたお二人の、実際に県大会で披露された発表を掲載します。

☆☆本校バトラーの紹介本☆☆

北村薫『スキップ』

筒井康隆『旅のラゴス』

森見登美彦『有頂天家族』

村山早紀『桜風堂ものがたり』



本校から参加した四名のバトラー

『有頂天家族』紹介文

駿台甲府中学校 米山姫生

みなさんこんにちは。

駿台甲府中学校2年の米山姫生です。甲府の学校に通ってますが、私が住んでいるのは南アルプスの麓、果樹園広がる南アルプス市です。自然が豊かなので夜になると、狸や狐、時には猿を見かけることがあります。その中で、特に私が好きなのが狸。彼らは、ぼてぼてとした丸い体に大きな黒い瞳で小首をかしげながらこちらを見上げてくるんですよ。その姿が本つ当に可愛いんです。今回、私がご紹介させていたたくのは、そんな可愛らしい毛玉たちの物語「有頂天家族」です。作者は、森見登美彦先生。「夜は短し歩けよ乙女」や「四畳半神話大系」などの京都を舞台にしたファンタジー作品を数多く書かれています。この「有頂天家族」も森見登美彦先生のリアルな京都の街並みにファンタジーが溶け込んだ独特な世界の中で話は進んでゆきます。

舞台は京都。ですが、みなさんが知っている京都とは少し違うんですよ。人間は街に住み狸を鍋にし天狗を畏れ敬う。狸は地を這い人を化かし天狗を畏にかける。天狗は天空を飛行し人間をかどわかし狸に説教をたれる。そう、暮らしているのは人間や狸だけではないのです。平安から続く狸と天狗と人間の三つ巴。

そんな京都を舞台にした、この物語の主人公は、狸の名門下鴨家の三男坊、

下鴨矢三郎。狸に名門つてのもおかしな話なんですけどね。生真面目で少々杓子定規な長男と蛙に化けたままひきこもった次男を兄にもち、気が弱いけどとても可愛い弟をもつ彼は、引退した老いぼれ天狗の世話係をしているごく普通の狸です。他と違うところがあるとしたら、他の兄弟よりも、偉大な父から受け継いだ「阿呆の血」が濃く、面白いことが人一倍好きなどころです。そんな彼の口癖は「面白きことは良きことなり！」私はこの言葉が大好きです。ひどく落ち込んだとき、落ち込んでいる理由がくだらなく思えて、面白おかしく笑って生きようと思えるんですよ。実は私、このビブリオバトルの練習のとき、先輩と後輩の素晴らしく素敵なスピーチを聞いて落ち込んでいたところ、この本を読みなおして、まずは自分が楽しむことが大事、ということを出すことができました。「面白きことは良きことなり」こんな素敵な口癖の彼には怖いものがあります。それは「弁天」と呼ばれるほどの美しい人間の女性。矢三郎の初恋の人です。なぜ：いったいなぜ矢三郎や他の狸たちまでもが彼女を恐れるのか。それは、彼女が毎年年末に狸を鍋にして食うという悪行をしているからです。そして、とうとう今年、矢三郎の家族が人間に捕まってしまう。狸鍋にされてしまった父のように食べられてしまうのか!! ですが、それぞれが諦めずに助け合うんです。バラバラだと思っていた家族が実は、それぞれの方法で家族を大切に思っていた。そういうのを読んでいると、家族っていいなあ、家族

を大切にしようって思えるんですよ。アクの強い毛玉たちのドタバタを笑いながらも、ふと自分の家族の顔が思い浮かんでくる。そういうところがこの本のすごいところなんです。まさに狸に化かされた気分!! ですから、本好きや動物好きはもちろん、心が疲れてしまっている方や反抗期の学生さん、天女のように美しい女性に魅了された人にも読んでもらいたいです。

思わず食べてしまいましたくなるほど可愛い狸たちの毛深い作品。合言葉は「面白きことは良きことなり」ですよ? ぜひ読んでみてください。



中学生の部で優勝した米山姫生さん

☆ビブリオバトルとは

- ①発表参加者(バトラー)がおもしろいと思った本を持って集まり、一人五分間で本を紹介する。
- ②それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを二、三分行う。
- ③すべての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか?」を基準とした投票を参加者(バトラー・オーディエンス)全員で行い、最多票のものその日の「チャンプ本」とする。

## 第4回駿小音楽祭開催!

駿台甲府小学校 依田 秀樹

十一月十二日(日)にコラニー文化ホール小ホールにて、第4回駿小音楽祭が開催されました。昨年と同様に、中学校から吹奏楽部と合唱部、高校から吹奏楽部と合唱部と管弦楽部に特別ゲストとして出演していただきました。

第一部は合唱部による演奏。一曲目は『船で行こう』。この曲は四月から取り組んでいる今年度一番練習した曲で、自信を持って歌っている子どもたちの様子に、成長を感じました。二曲目は『やさしさに包まれたなら』、『ひこうき雲』、『カントーロード』、『いのちの名前』、『もののけ姫』、『となりのトトロ』の計六曲をメドレーで披露しました。曲数が多く、また二部合唱になる場所も多かったため、歌詞を覚えるのが大変だったと思いますが、子どもたちは練習の時から一生懸命取り組んでいて、本番では今までで一番良い演奏ができました。また、『もののけ姫』と『となりのトトロ』では中高生にも参加していただき、より幅のある歌声をお届けすることができました。合唱ステージの最後には、中高生と一緒に、NHK全国学校音楽コンクールの課題曲にもなった『ふるさと』を歌いました。中高生



と歌うことで、子どもたちにとって良い経験となりました。

第二部は吹奏楽部による演奏。『富士山』『小さな恋のうた』『風になる』『バイレ』『オプザ カリビアン』『銀河鉄道99』を演奏しました。

今年の吹奏楽部のテーマは『レッツ！駿小ミュージック！』です。聞いている人も吹いている自分たちも楽しめる、そんな音楽を奏でられるよう、練習に取り組んできました。今年、6年生のソロや4年生のバトン、手作りの背景画などパフォーマンスにも力を入れ、本番のステージはより一層華やかなものとなりました。「顔を真っ赤にして吹く子」、「大きな楽器を重そうに抱える子」、「体でリズムをとって力いっぱい太鼓を叩く子」、その一生懸命さと楽しそうに演奏する姿に自然と拍手が沸き起こりました。



四年生は初めての音楽祭で、どちらの部活の子たちも、ホールでしか感じる事が出来ない響きを楽しんでいる様子でした。週二回の少ない練習時間の中で、子どもたちはこの演奏会に向けて本当によく頑張りました。素晴らしい演奏会になりました。来場者数も回を重ねるにつれ段々増えてきて、今回は約四百名の方にご来場いただきました。

この演奏会を通して子どもたちの音楽経験がより豊かなものとなり、これからの音楽の授業や学校生活に活かしてほしいです。

## 文化公演会

駿台甲府小学校 中楯 美紗

十一月六日(月)文化公演会が行われました。今年度は、劇団スタジオライフの方々をお招きし、影絵劇の上演をして頂きました。演目は、『あらしのよるに』とその続編の『あるはれたひに』です。この二作品は、絵本としても有名で、アニメ化、映画化もされている作品です。内容としては、ある嵐の夜に、真っ暗な中で出会ったオオカミとヤギが、その後、ある晴れた日に再会するというものです。オオカミにとっては、ごちそうでもあるヤギですが、暗闇の中で、姿を知らずに、友達になってしまったので、オオカミは、友情と食欲という二つの感情に挟まれ、どうしたらいいのか困ってしまふという、愉快で、心温まるお話です。

影絵という、モノクロをイメージしてしまいがちですが、今回の影絵は、色彩もとても豊かで、美しい映像の中で行われました。語り手の方も、一人でオオカミとヤギの声を分け、ナレーションもされていました。生の声に合わせて動く影絵劇というのは、大人にとっても、新鮮でした。BGも子どもたちに親しみのある曲を選曲しているということで、子どもたちの明るい笑い声が響く劇となりました。

演目の間には、ワークショップも行われ、きつねやうさぎといった様々な動物の手影絵を子どもたちが実践することができました。また、その場で選ばれた児童が、実際に、影絵劇を体験させて頂くこともできました。スクリーンの裏側で、大きな人形を歩いているように、動かしたり、セリフに合わせて、動作をさせたりするということは、難しかったようですが、非常に楽しんで、取り組んでいました。見ている側の



子どもたちも、友達が動かす影絵に興味津々で見入っていました。貴重な経験をさせて頂くことができました。後日、劇団の方から頂いた影絵の見本を使って、人形を作り、影絵劇をやったという児童もいたようです。

上演後に、劇団の方から、オオカミとヤギ、二匹の友情の結末は、ぜひ自分で読んでみてほしいというお話がありました。子どもたちには、今回の文化公演会を通じて、友情や想像力の大切さ、生の舞台を観ることの面白さなどを感じてもらえたら、嬉しいです。今後も、多様な文化に触れ、様々なことを学んでほしいと思います。

最後になりましたが、PTA文化部の皆様のご協力により、このような有意義な文化公演会を行うことができました。ありがとうございました。足らぬところがありました。また、お忙しい中、足を運んでくださった保護者の皆様にも感謝申し上げます。